

平成 21 年 6 月 11 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19800037

研究課題名（和文） 朝鮮半島における植民地近代とスポーツに関する史的考察

研究課題名（英文） The historical study on the sports and colonial modernity in Korea

研究代表者

金 誠 (KIN MAKOTO)

札幌大学・文化学部・講師

研究者番号：40453245

研究成果の概要：本研究は「植民地近代」という分析概念から植民地朝鮮におけるスポーツの果たした機能・役割について考察を行った。結果、朝鮮人知識人らはスポーツに近代的な価値を見出し、それを植民地社会に普及させることで植民地社会の発展に寄与していこうとしたことが分かり、またスポーツでの活躍が民族の発展を象徴するものとして捉えられていたことが分かった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	810,000	243,000	1,053,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,710,000	243,000	1,953,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：スポーツ科学

キーワード：朝鮮半島、植民地近代、スポーツ

1. 研究開始当初の背景

応募者はこれまで朝鮮半島における植民地支配とスポーツの関係について研究を継続してきたが、これまでは支配者側の政策の一環として、スポーツの果たした役割・機能について言及をしてきた。しかし、文化が一方通行ではなく、アクターの捉え方によって様々に理解・実践される点を考慮すると、当然これまでの研究では説明できない事象にも遭遇することとなった。そのため植民地支配下の朝鮮人らがスポーツをどのように捉え、実践してきたのかという点が次の課題として浮上し、本研究への着想に至った。

本研究に関連する韓国のスポーツ史研究

においては、そのほとんどが民族主義的なイデオロギーで語られており、そのイデオロギーの強さのために研究そのものが閉鎖的なものになっている感が拭えない。またそうしたイデオロギーを排除した事実関係の丁寧な把握が課題として考えられる。

日本においては植民地時代の体育・スポーツを植民地政策の一環として捉える研究は進んでいるものの、朝鮮人知識人層ら中間に位置する人々をアクターとして設定し、植民地期のスポーツに着目して語る研究は現在のところ見当たらない。

そのため本研究では植民地のなかでスポ

ーツがどのような役割を果たしていたのかを植民地近代という視点から研究しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は朝鮮半島の植民地時代(1910-1945)に行われたスポーツに着目して、当該期におけるスポーツの果たした役割、とりわけ本研究においては朝鮮人の知識人層ら(=金性洙を中心とする東亜日報グループ)がスポーツをどのように捉え、そしてそれをどのような意図をもって植民地社会に導入・普及しようとしたのかについて考察するものである。

本研究の中心となる朝鮮人の知識人層らは朝鮮総督府の監視から逃れられない条件ではあったものの、当該期の朝鮮人社会の経済・言論・教育など様々な分野で影響力を持っていた。特に金性洙という人物は植民地時代に京城紡織、東亜日報、普成専門学校を経営するなど、その経済力を背景に植民地社会において強い影響力を有し、植民地解放後は韓国民衆の事実上の総裁としても力を発揮している。

現代の彼らの評価は二分され、ひとつは近代化を推し進めたとする肯定的な評価を受けており、他方では当時の彼らの言動から植民地支配を手助けした点が指摘され、対日協力を行ったとする否定的な評価を受けている。いわば「親日派」として非難を受けているのである。

ただ近年の研究動向のなかで、彼らを中心とする対日協力者らを親日派として断罪するといった議論に終始することなく、「植民地近代(Colonial Modernity)」という概念を用いることによって支配-被支配の二分法的であった植民地朝鮮の研究に対して一石を投じる成果がみられるようになった。これは植民地支配を正当化する議論とは隔絶しており、植民地下における支配と被支配の中間に位置した人々の動きに注目して行われる研究であると言っていいたいだろう。

本研究において「植民地近代」を語る上で不可欠なのは、近代化を志向したとされる彼ら朝鮮人知識人層らの多くが青年時代に日本へと留学しており、朝鮮半島に戻ってからはその経験を生かしてそれぞれが地位ある分野で活躍することになったという点であろう。そのため彼らの足跡を追っていくことで、日本と植民地朝鮮の連続性と不連続性を知る手がかりになる。

ことにスポーツへ目を向けると、彼らが留学した時代は日本においても近代スポーツが定着・進展しつつある時期でもあり、また

国際的な視角からは、19世紀末に近代オリンピックが開催されるなど国際社会におけるスポーツの認知度が高まりつつある時期でもあった。こういったことを考慮すると、近代スポーツの社会への浸透度が近代化・国際化のメルクマールとして機能しえる状況にあったと換言することもできる。

さらに植民地化された社会においてはスポーツがカウンター・カルチャーとしての機能を併せ持つものであった点も重要な要素のひとつである。このような点をふまえていくと現代のイデオロギーで単純に「親日派」といったレッテルを貼られる知識人層らも、スポーツを通じて民族的なプライドを表現しようとした点があったのではないかと考えられる。

またその一方で植民地下をうまく生き抜くために当該期における「内鮮融和」や「内鮮一体」というスローガンのもとで植民地支配に資するようなスポーツ交流も選択せねばならなかったのではないかという点も考えられ、スポーツという文化を通して、錯綜する朝鮮人知識人層らの葛藤と利害に関わる行動が、この視角からみられるのである。

よって本研究は植民地朝鮮における朝鮮人知識人層、本研究においてはとりわけ東亜日報グループの人々が当時のスポーツをどのように捉え、当該期の植民地社会に導入・普及させようとした意義について考察を加え、植民地朝鮮におけるスポーツの役割の一端を明らかにするものである。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するための計画・方法は以下の通りである。

- 1) 「植民地近代(Colonial Modernity)」の概念規定とその展開に関する検討
- 2) スポーツ史研究、朝鮮史研究を中心とする先行研究に関わる文献・論文の収集、及び検討・分析
- 3) 日本国内における関連史資料の収集、翻訳及び分析
- 4) 韓国国内における関連史資料の収集、翻訳及び分析

4. 研究成果

本研究の結果と考察は以下の通りである。

- 1) 朝鮮半島における「植民地近代」とスポーツの関係は1930年代以降を中心に規律権力論に依拠して語られる傾向にある。それらは総督府当局が如何に近代的な身体を形成していこうとしたかを証明するものであつ

た。

2) 旧韓末に朝鮮半島から渡ってきた留学生が、日本でどのような思想をもって体育・スポーツを実践してきたのかを孫煥の論文と金洪周の著書に依りながら確認した。留学生らは体育を通じて弱肉強食の競争に打ち勝ちうる能力を育て、健全たる韓国の青年を養成することが目的とされ、当時の朝鮮人知識人らの中での体育・スポーツへの価値観が窺えた。

3) 次に金性洙が日本へ留学していた時期の日本のスポーツの特質を確認した。当時の日本のスポーツは国際的な活動として、また国際交流の機能を持っていたことにその特質があり、こうした点を踏まえ植民地支配下にあった朝鮮半島のスポーツの進展過程をこの時期からの連続性として見る視点を提示した。



写真1. 金性洙像（高麗大学にて）

4) 上記との繋がりのなかで金性洙に着目するとき、彼の行った事業、すなわち東亜日報社の経営と普成専門学校の経営とスポーツとの関係を考察した。例えば東亜日報社は朝鮮体育会の設立に寄与し、また女子体育の発展にもその手腕を発揮している。



写真2. 金性洙像（東亜日報社にて）



写真3. 金性洙旧居（ソウル市桂洞にて）

普成専門学校では体育部が活躍し、1930年代には当校籠球部は全日本選手権大会で3連覇をするなど朝鮮半島のスポーツの発展を示唆する活動がみられた。さらに1936年のベルリンオリンピックでは蹴球部の金容植も活躍するなど、スポーツの場における朝鮮人の活躍が顕著に現われるようになっていた。



写真4. 宋鎮禹像（ソウル市オリニ大公園にて）

これらについて重要なことはスポーツという活動が植民地期の朝鮮において近代的な価値観を多くの人々に知らしめるものであったということである。

5) 今後の課題として朝鮮半島におけるスポーツが解放直後にどのような役割を果たしたのかという視点は本研究を発展させるうえで重要である。つまりこのときのスポーツに関わる制度が如何に継承され、如何に捨象されたのかを確認することで朝鮮半島におけるスポーツの実態を再考できると考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

金 誠、「植民地近代」とスポーツに関する一試論」、札幌大学総合論叢第27号、
p.141-150、2009、査読無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金 誠 (KIN MAKOTO)

札幌大学・文化学部・講師

研究者番号：40453245

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者